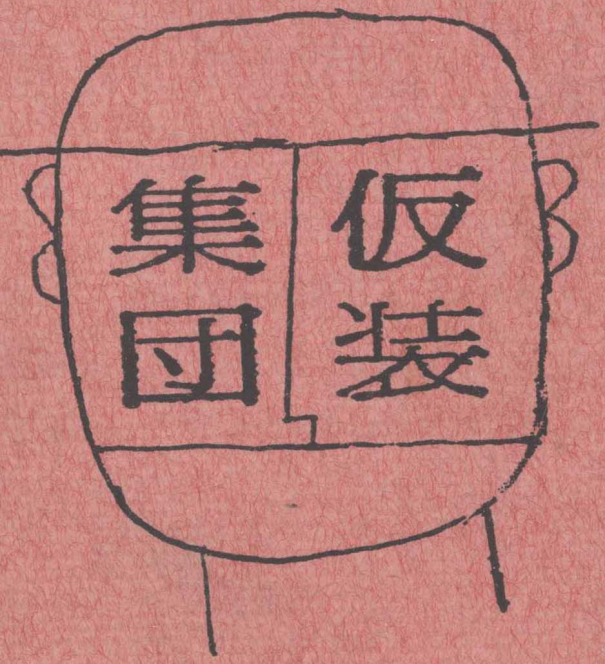
仮装
集団

仮装集団

山崎豊子

文藝春秋

仮装集団

昭和四二年四月三〇日　第一刷

定価　五六〇円

著者　山崎豊子

発行者　上林吾郎

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三

印刷　凸版印刷

製本　加藤製本

製函　文京紙器

© 1967 toyoko YAMASAKI Printed in Japan

■万一乱丁落丁がありましたらおとりかえします

仮装集団

装幀　早川良雄

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

一章

舞台の上では、オペラ『蝶々夫人』の第二幕が始っていた。丘の向うに港が見え、春の陽ざしが降りそそぐ座敷で、ピンカートンの帰国を待ち望む蝶々夫人が『或る晴れた日に』を美しいソプラノで舞台一杯に唄い上げている。

歌舞伎風の華やかな舞台を背景に、振袖を胸もとに組み合わせ、遠く異国へ去って帰って来ぬピンカートンを花が咲き、駒鳥が巣をつくる頃にはきっと帰って来ると、信じている蝶々夫人の哀切な唄声が、舞台の明り障子を震わせるように響いている。原三枝子の演じる蝶々夫人は、オペラに歌舞伎の演出を持ち込んだ新しい試みの中で、見事に唄い、演技している。舞台を見詰める聴衆の間にも、新しい試みのオペラを観る昂奮がたちのぼり、勤労者音楽同盟主宰のオペラ『蝶々夫人』は成功をおさめつつあった。

舞台裏にいる関西オペラの劇団員はもちろん、勤労者音楽同盟の関係者たちも、その成功に昂奮し、酔うような熱気がたちのぼっていたが、このオペラの企画者である流郷正之は、舞台の袖に黒い影のように突っ起ち、酔いのない醒めた表情を、観客席へ向けていた。

流郷正之の胸に、七年前、始めて勤労者音楽同盟が発足した当時のことが思い出された。

僅か四百人程の会員が集り、音楽教室やレコード・コンサートを開き、その翌年の暮れ、会員が六百人になった時、始めて勤労者音楽同盟の第一回例会を開いたのだった。それは今日のように豪華な会場ではなく、終戦後六年経ってもまだ荒れ果てたままのがらんとした大阪市立公会堂に、僅か六百人の聴衆が集り、しんしんと冷えわたる会場で、黙々とベートーヴェンのピアノ・ソナタを聴き、演奏が終ると、堰を切るような激しい拍手が響いた。凍えるような指先で弾き終った演奏者がピアノの前から起ち上がって一礼すると、聴衆も席から起ち上がって再び激しい拍手を贈り、ステージと聴衆の間に、眼に見えない一本の太いベルトが強く張り渡されたのだった。

それから六年、流郷たちが組織している勤労者音楽同盟は、良い音楽を安く聴く勤労者のための音楽鑑賞団体とし

て、会員増加の一途を辿り、何時の間にか三万人の会員を擁する団体になったのだった。僅か六年間に、五十倍の会員にまで膨れ上がったのは、戦後の経済困窮の中で、一般の音楽会へ行く余裕などなく、音楽に飢えていた勤労者に、月額五十円の会費でクラシックの優れた音楽を聴かせたことと、各職場の労働組合文化部が、その宣伝、企画、切符販売などを積極的に受け持ち、聴衆組織の拡大に協力したためであった。職場単位の各サークルから集った会費で、設備の整わない二流、三流の会場を借り、演奏者にも、勤労者のためにという名目のもとに、無理な演奏料で出演を依頼していたその頃のことを考えると、勤労者音楽同盟が、収容人員二千人の大阪の中心地にあるS会館のホールを借り切り、豪華なオペラの例会を行うなど、信じられないほどの発展であった。しかも、これまではピアノ、ヴァイオリン、独唱、管弦楽、室内楽など、ほぼきまった例会を続けて来、今度、始めて流郷の企画で、大がかりなオペラを催すことになったのだった。それだけに、流郷にとっては、舞台の出来よりも、観客席の反応の方が、重要事であった。

流郷は、舞台の袖から上半身を傾けるようにして、さらに観客席に瞳を凝らした。十八、九歳から二十七、八歳ぐらいまでの電鉄、鉄鋼、造船、電力などの現場勤労者をはじめ、官公庁、商社、銀行などの事務系統の男女の勤労者が、勤務を終えたままの服装で坐り、その八割までが、始めてなまのオペラを聴く聴衆で、解説書を片手に、固唾を呑むように舞台を観、歌手の歌に聴き入っている。どの顔も素朴な感銘と昂奮に満ち、立見席に起っている聴衆も喰い入るように舞台に観入り、普通の音楽会やリサイタルなどでは見られない緊張感が場内に漲っている。

視線を舞台に移すと、舞台は二幕の二場になり、港に軍艦が入ったと聞き、座敷に美しい花を散り敷き、盛装して一晩中、ピンカートンの訪れを待った蝶々夫人が、シャープレス領事と女中のスズキからピンカートンの裏切りを報され、激しい驚愕と悲しみの中で、死を覚悟した別れの歌を消え入るように細い澄み通った声で唄っている。切々とした哀しい調べが舞台を震わせ、オーケストラの低い弦楽器が緊迫した旋律を奏でている。子供を膝の上に抱き上げた蝶々夫人は、なおも哀しい調べを唄いながら、子供の手にアメリカの国旗を持たせ、白い眼隠しをし、自らは短刀を取って自害の心を決め、次第に破局へ進んで行く。

悲壮な音楽が響き渡り、蝶々夫人の死を告げると、ピン

カートンが駈けつけ、蝶々夫人の屍に跪き、慟哭するうちに静かに幕が降りた。

割れるような拍手が鳴り、アンコールが求められた。幕がするすると上がり、蝶々夫人の原三枝子を中心に、ピンカートン、シャープレス、スズキに扮した四人の歌手たちが聴衆の歓呼に応えて何度も礼をし、原三枝子がつと、ステージの前へ歩み寄った。

「勤労者音楽同盟の皆さん、今晩は！　一日の尊い労働のあとに私たちの歌を真剣に聴いて下さって有難うございます、音楽家といえども、皆さんと同じ勤労者であり、その成果の九割までが汗と脂の結晶です！」

何時もの驕慢に取りすました顔に、にこやかな笑いをうかべて挨拶すると、観客席から激しい拍手が鳴った。原三枝子はさらに言葉を継いだ。

「皆さん、私たちは今後も、働く人たちの手によって生れ、組織された勤労者音楽同盟のために唄い続けます！」

再び割れるような拍手が湧き、どよめくような喚声が場内に響いたが、舞台の袖から観客席を見守る流郷だけは、青白んだ広い額の下に、魚族のように動かない冷やかな眼を向けていた。

何度目かのアンコールの幕が降りると、原三枝子は、付人に首筋の汗を拭わせながら、流郷の方を向き、

「いかがでした？　今日の私の出来は――」

自信に満ちた聞き方をした。濃紺の背広に長身を包んだ流郷は、三十五歳にしては落ち着き払ったもの腰で、

「大へん結構でしたよ、特に第二幕の第一場は素晴しかったです、あの場面は抒情的でありながら、劇的に唄い、演じなければならないので、大へん難しいところですが、実に巧みな歌と演技でしたね、その上、終演後の聴衆へのあなたの挨拶は、とても効果的でした」

「あら、あれは、あなたが――」

と云いかけると、流郷は眼で制し、

「お疲れのところを恐縮ですが、三十分後、九時から会館五階のティー・ルームで記者会見を行いますからご出席下さい、出演者は、主演者のあなたと、演出者の花井達也氏、指揮者の森好彦氏で、お二人には既にご連絡してあります、私たちの方からも、三名出席します」

と云うと、くるりと踵を返し、舞台の袖から奈落の暗い通路を通り、表の廊下へ出た。

何時もなら、華やかに着飾った音楽会や芝居の観客に彩られている赤い絨毯を敷き詰めた廊下を、埃をかぶった頑丈な靴を履いた現場勤労者らしい若者や、社名の入った紙

袋を抱えた事務系統の社員、ショルダー・バッグを肩にかけた若いBGなどが出口へ向っている。まだ昂奮の醒めない紅らんだ面持をしているが、これから市電や地下鉄、郊外電車に揺られて帰宅することが気重いらしく、腕時計を覗き込んで、時間を気にしている。流郷は、そんな人の流れに随いて、出口まで来ると、足を止めた。

青いリボンのような細長いカードを手にした聴衆が列をつくり、出口の横に備えつけられた白い木箱の中へ、カードの一片を千切って投入している。それは勤労者音楽同盟が、例会の度に行っているもぎり式アンケートの投票で、その日、参集した聴衆に、『非常によかった』『良かった』『少しもの足りない』『つまらない』『その他』の五項目をミシン線を入れて区分したカードを渡し、その何れかを千切って、投票箱へ投じさせているのだった。カードを手にした聴衆は、投票箱の前まで来ると、気負うような表情で、自分たちの意志を投票箱へ投げ込んで行く。もちろん、カードを受け取ったまま、棄権する者も多いが、今夜のように例会が盛況で、昂奮した雰囲気に包まれている時は、棄権が少ない。流郷は、白い木箱の中へ落ちるブルー・リボンのようなカードに視線を当てていた。

不意に背後から、肩が叩かれた。振り返ると、事務局長の瀬木三郎であった。油気のない前髪が額に垂れ下がり、度の強い眼鏡の下から神経質な視線を向け、

「なかなか活潑な投票ぶりだね、組織部の調べによると、この例会で会員が一挙に二千五百人も増加したということで、最初は運営委員会に反対されながら、推進した君の企画は、どうやら成功らしいよ、しかし、ほんとうに成功であったか、どうかは、あのアンケートを集計し、その数字を基礎にして討論される運営委員会の批評会の結果を待たなければ解らない」

慎重な云い方をした。

「いくら現実に例会が成功しても、運営委員会の批評会における討論に勝たなければ、成功したことにならないというわけですね」

流郷は薄い笑いをうかべると、

「運営委員会の批判は、会員の意見を代表するものだから、何時の場合も、公正な批判が出るはずだよ」

「そうだといいのですがねえ」

流郷は皮肉な語調で云い、

「そろそろ、記者会見の時間ですから、委員長を誘って五階のティー・ルームへ上がって下さい、私は出演者をもう一度、見て来ますから——」

そう云うと、流郷は、慌しく楽屋へ足を向けた。

淡黄色の壁紙と柔かい間接照明に照らされたティー・ルームの奥まった一角で記者会見が開かれた。

長方形のテーブルの正面に、メーキャップを落して、ローズ色のスーツに着替えた主演者の原三枝子が坐り、その左側に演出者の花井達也とオーケストラの指揮者の森好彦が並び、右側に勤労者音楽同盟の委員長と事務局長が坐り、それに向い合って、八社の音楽記者が席を占め、流郷は、司会者としてテーブルの末席に着いた。

紅茶が運ばれて来ると、流郷は舞台の袖にいた時とは別人のようなにこやかな表情で起ち上がった。

「今夜は、ご多忙の中をお集り戴き、有難うございました、勤労者音楽同盟、〝勤音〟も誕生以来、やっと七年目に本格的なオペラを催すことが出来、この機会に音楽記者の方と懇談致したいと存じたわけです。出演者の原三枝子さん、演出者の花井達也氏、指揮者の森好彦氏は既によくご承知でしょうから、勤労者音楽同盟の出席者を紹介させて戴きます、中央の右側が委員長の大野泰造、その隣が事務局長の瀬木三郎です」

紹介すると、委員長の大野は、電鉄労組の執行委員を長年、勤めた組合活動家らしい精悍な顔で、

「若い時、職場の歌唱指導をしていた経験をかわれて、五十近いこの齢で、昨年から勤労者音楽同盟、我々のいうところの勤音の委員長をやらされとります」

無骨に挨拶すると、事務局長の瀬木は、度の強い眼鏡の下から鋭い眼をきらりと光らせ、よろしくと言葉少なに挨拶した。八社の音楽記者たちも、各自、自己紹介をし、最後に音楽記者会の幹事で、一番古顔の毎朝新聞の記者が、

「今まで私たち新聞記者に閉鎖的であった勤音が、こうして積極的に記者会見を持つようになったのは、驚くべき進歩じゃありませんか」

勤音の意図するところを探るように云った。流郷は、にこやかな笑いを消さず、

「閉鎖的など、とんでもないことです、勤音が今まで記者会見を持たなかったのは、記者会見するほどの音楽的な内容がなかったからで、今度のオペラの例会を機会に、今後は積極的に皆さん方と懇談させて戴きたいと思っております、早速、今夜のオペラに関して忌憚のないご意見を伺わせて戴きたいと存じます」

慇懃な姿勢で司会すると、若い記者が、

「なかなか意欲的なものでしたよ、これまでオペラといえばイタリヤ語やドイツ語でやっていた歌詞を、全部、日本語に翻訳して、歌舞伎の演出法を取り入れたのは、全く新しい試みですが、演出者は大分、前から考えておられたことですか」

パイプをくわえて、ワイシャツの衿もとから鬙に似合わない赤いスカーフを覗かせていた花井達也は、

「いや、勤音から歌舞伎の技法をオペラに取り入れてドラマチックな演出をしてほしいという申入れを受けたのですよ、その時は、少なからぬ危惧を覚えましたけれど、歌舞伎の伝統演技が日本の古典音楽の中で様式を通してリアルな演技体系を打ちたてていることを考えると、それを解きほぐして別の音楽劇のジャンルに応用することは不可能ではないと思い、オペラの中へ大胆に歌舞伎的演技を持ち込んだわけです、私をしてこうした試みに踏みきらせたのは、ほかならぬ流郷君の企画力ですよ」

パイプをふかしながら、応えた。

「じゃあ、歌舞伎様式の演技をし、歌を唄われた原三枝子さんはいかがです、唄いにくかったですか」

原三枝子は、自分に質問を向けられると、俄かに華やかな笑顔をみせ、

「そりゃあ、始めのうちは、馴れない演技の方に気を奪われ、歌がおざなりになりそうでしたが、練習を重ねているうちに歌舞伎風のリアルな演技が、逆に歌の心を引き出してくれました」

「原さんの今日のアンコールでの挨拶、正直云って、何時ものあなたとは勝手の違った印象を受けたのですが、勤音の聴衆ということを特に意識されているのですか」

「いえ、そんなことは別に……、でも勤音の聴衆はすばらしいですわ、今までの普通の音楽会の聴衆は、静かに聴いて下さり、拍手をするべきところもちゃんと心得て下さっているのですが、それはいわゆる音楽マナーといったもので、勤音の聴衆の方は幕があいたその時から、こちらの胸に飛び込んで来て下さるような感じ、つまり生きているハートで聴いて下さるという熱烈さで、唄いながら感動してしまいました、歌手生活十二年、頭の先から足の爪先までこんなに力を入れて唄ったのは始めてです」

熱っぽく喋りながら、原三枝子はちらっと、流郷の方を見た。さっきのステージでの挨拶も、今の言葉も、すべて勤音向きに流郷がつくり、演出した言葉であった。

「ほう、プリマ・ドンナのあなたにしては、大した感激ぶりですね、じゃあ、指揮者の森さんは、歌舞伎的演出による

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

オペラの指揮を始めてされたわけですが、そのご感想は？」
森好彦は、ダーク・スーツにきちんと蝶ネクタイを締め、ゆったり足を組んだポーズで口を開いた。
「ヨーロッパのオペラには、いろんな約束ごとがあり、この音がきっかけで、こういう振をするという約束があるわけですが、今までその通りにして来たのを、今度は歌舞伎的な演出でやるのですから、そこに少なからぬ混乱が起る、極端な例を云うと、歌舞伎的なリアルな演技を重んじて蝶々夫人がうしろ向きになって丘のうしろの港を望んでいる時、音楽のサインを送っても見えないわけです、指揮者としてはそうした歌舞伎的なリアリティと、オペラが本来的にもっているファンタスティックなものとの混乱を如何に埋めるかということに苦労しましたが、ユニークな試みのある仕事で、その上、聴衆が聴くことによく訓練されていて気持がよかったですよ」
快げに云うと、一人の記者が、
「その聴衆組織のことですが、全く私たち記者の眼からみてもよく組織されていますね、昼間の勤務に疲れているはずなのに真剣な態度で聴き入り、終演後は、自分たちの意志を投票して帰る、一体、これほど見事に組織されている勤音のほんとうの主宰者は、誰なんです？」
委員長の大野に質問が向けられた。大野は精悍な顔で体を乗り出し、
「勤音の主宰者は、勤音の一人一人の会員です、というのは会員三人以上で一サークルをつくり、地域ごとにサークルをまとめて、サークルの中から地域委員を選び、さらに地域委員の中から選んだ運営委員によって構成される運営委員会で、勤音の活動方針が決定されるのですから、会員の一人一人が勤音の主宰者で、事務局は、それぞれ自分の勤務を持っている運営委員に代って、決定事項を具体化し、実行に移す機関です」
「すると、毎月の例会の企画立案は、どういう過程で行われているのです？」
事務局長の瀬木に質問が向けられた。瀬木は神経質な表情で、
「それは、まず事務局で、会員の希望調査をもとにして、幾つかの試案を作り、それを企画担当の運営委員と地域委員、事務局員で構成される専門委員会で討論してから運営委員会にかけ、ここで正式に決定されるわけです」
「ところで、勤労者に良い音楽を安く聴かせるためとはいいながら、勤音の例会費はよくもこれだけ安く出来ると思われるほどの安さで、その会費の安さが会員獲得、聴衆組

織の拡大に役だっているわけですが、そんなにまでして組織拡大に力を入れている勤音は、革新的な音楽鑑賞団体として、どういう点を意図しているのです？」

不意に、流郷の方へ鋭い質問が向けられた。流郷は一瞬、虚を衝かれたようであったが、

「どうも、皆さんは、勤音というと必要以上に神経質になっておられるようですね、どんな団体も、団体である以上、会員数は少ないより多い方がいいにきまっております。勤音の性格について、何か疑問をお持ちのようですが、勤音はまぎれもなく、勤労者のための純粋な音楽鑑賞団体で、一人のオルグも、一人の英雄もなく、働く者の聴衆組織に過ぎません、それでもなお疑問がおありの方は、今後の勤音の音楽活動を通して正しいご理解を戴きたい次第です」

流郷は巧みに言葉を締め括りながら、勤音の実体は、事務局にいるこの自分にだって明確なことは解らない、解らないが、俺自身は、俺なりの考えで、この強大な組織を牛耳ろうとしているだけのことだ――、流郷の眼に微妙な光が漂った。

*

勤音の事務局は、昼休みと会社の退け時が最も忙しい。各職場の勤音のサークルが、この時間に、例会の申込みや会費の支払いなどを行うからである。したがって、梅田新道の近くにある近畿観光ビルの四階にある勤音の事務局は、昼休み前になると、活気附く。

例会のポスターや予定表が処狭いばかりに貼り附けられた十五坪程の室内に、組織、財政、企画の三部門が仕切りなしで机を並べ、二十人の事務局員が、それぞれの部署に分れて仕事をしている。流郷正之は、窓際の企画部のデスクで早い昼食をすませると、受付の方を見た。十二時を少し廻ったばかりであるのに、会費の納入や例会の予約申込み、レコード借出しをする会員が入口の受付に群がっている。三人の受付係が会費を受け取って財政部の会計係へ廻すと、会員名簿と引き合わせて、領収印を捺した会員証を発行し、管理係では例会予約の割振表と照合して、予約を申し込んで来ているサークルの日割券を発行する。レコード貸出しは組織部の事業係が、入口横の小さなレコード室でプレーヤーをかけて希望のレコードを貸し出し、流郷の

いる企画部も、職場の各サークルから例会企画の問合せ電話が頻繁にかかっている。どの部署も一時になる多忙さの中で、財政部が特に忙しい。四人の部員が伝票と計算に追われ、殺気だつような気配の中で、財政部の責任者である江藤斎子は、オペラ『蝶々夫人』の収支決算表を作成しながら、部員が持って来る伝票に眼を通し、判を捺し、次々と仕事を片附けている。

短くきり揃えた断髪の下に、広い冴えた額と眼尻のきれ上がった大きな一重瞼を見せ、グリーンのシャツ・ブラウスで机に向っている江藤斎子の姿は、そこだけぱちりと切り取って、額縁の中へ塡め込んだような鮮烈な印象であった。二十人の事務局員はもちろんのこと、事務局へ出入りする各サークルの代表者や委員たちも、二カ月前、江藤斎子が、東京の勤音の事務局から大阪の事務局へ替って来たその時から、眼を瞠るように、一斉に注目したのだった。それは二十七歳の江藤斎子の美しさが、強い個性を持っていたからではなく、勤音の財政を握る財政部の責任者として入って来たからであった。何かがある——、彼女を見る事務局員の誰もが、そう考えたが、江藤斎子は執務に関すること以外は、殆ど口をきかず、薄く引き結んだ唇に、酷薄さのようなものを湛え、人を寄せつけない冷やかな雰囲気を身につけていた。

流郷は、そんな江藤斎子に、変った女という好奇心を抱いたが、流郷は自分の方から近附くようなことはしない。妙な小細工をして近附かなくても、今度のオペラの収支決算表は、江藤斎子が作成することになっているから、その結果を報告する運営委員会の席上で否応なしに、斎子と接触を持つことになる。

流郷は、机の上に積み上げられているもぎり式アンケートの集計に眼を遣りながら、ちらりと江藤斎子の方を見ると、事務局長の瀬木が斎子の方へ近寄った。

「江藤君、運営委員会に出すオペラの収支決算表は出来ていますか」

斎子は始めて、ゆっくりと顔を上げた。

「いえ、まだ細部の計算が出来ておりません、けれど、運営委員会が始る午後六時までには、完全なものが出来上がります」

にこりともせず応え、再び視線を机に向けた。瀬木は黙って頷き、流郷の席へ近附いた。

「流郷君は、アンケートの結果をちゃんとまとめておいてくれ給え、会員の明確な意識の表示であるアンケートの数字が、運営委員会の討議の基礎になるんだからね」

瀬木は念を押すように云った。会員の意識、運営委員会、討議――、瀬木のように長年、労働運動の中で育って来た人間にとっては、何でもない日常語であるかもしれないが、流郷にとっては、虫唾の走るような言葉であった。

流郷正之が、瀬木の勧めで勤音の事務局へ入ったのは、流郷に勤音に同調する格別の主義があったわけではなかった。大学の経済を卒業してすぐ入社した貿易会社がつぶれ、音楽事務所や小さな劇団の音楽演出などをして、いわば音楽浪人のような生活をしている時期に、瀬木から、勤労者に良い音楽を安く聴かせる勤音の組織作りに参加しないかと誘われたのだった。革新的な意図を持ったその主義、主張には何の関心もなかったが、学生時代から音楽が好きで、学生オーケストラをつくってその指揮をしたこともあり、演奏家になろうとは思わなかったが、音楽で何とはなく、めしが喰えたらと考えていた流郷にとっては、渡りに舟の話であった。例え特殊なイデオロギーを持った革新団体であってもその組織を利用し、自分の音楽的欲望を実現出来れば、それでいい――そんなふてぶてしいとも、一種の虚無主義ともつかぬ考えが、流郷の胸の奥に巣くっている。しかし、流郷を勤音に誘った瀬木は、勤音の企画担当者として積極的に活動している流郷の行動を疑わず、むしろ、流郷が次々に持ち出す目新しい企画を認め、常に協力的であった。

「瀬木さん、アンケートの集計結果は、非常にいいですよ、これだけよければ、運営委員会だって、そう文句はつけられないでしょう、それより、あちらの結果の方が気懸りですよ」

流郷は、収支決算表を作成している江藤斎子の方を見て云った。

定刻の六時になると、事務局の会議室に十人の運営委員が顔を揃え、委員長の大野泰造と事務局長の瀬木を中心にテーブルを囲んだ。

一日の勤務を終えて来た運営委員たちは、ワイシャツの袖をまくり上げたり、靴を脱いで椅子の上に坐ったり、いかにも勤音の集りらしい気取りのなさであったが、紅一点の江藤斎子と、こうした席には不似合いなほど身ぎれいな流郷の身装が眼についた。

番茶が運ばれて来ると、事務局長の瀬木は度の強い眼鏡の下から一同を見渡し、

「只今から九月例会、オペラ『蝶々夫人』の批評会を始め

ます、多くの会員を代表されている運営委員の皆さんの活潑な討議を期待します」

簡単な挨拶をすると、委員長の大野が色の浅黒い精悍な顔で言葉を継いだ。

「聴衆動員数の上でいえば、勤音始って以来の盛況で、おかげでこの僕は、記者会見など馴れんことまでやらされ、内外に反響の大きい例会であったんだが、その評価については冷静に論議して貰いたい、まず事務局の企画担当者の報告から始めて貰おう」

流郷は、瀟洒な身装で起ち上がった。

「オペラ『蝶々夫人』は、企画委員会で既成のものをそのまま安易にとり上げるのではなく、われわれの生活感情に根ざしたものをという基本方針が打ち出され、その方針に添って制作したものですが、例会の結果は、会員動員数三万二千人、ステージ数十六回、土、日曜日のマチネーを入れて十三日間連続上演し、今まで故意に勤音を無視して来た在阪八社の新聞の音楽欄も、始めて勤音の例会を取り上げました。もぎり式アンケートの集計結果は、総投票数一万七千百十三票で、その内訳は非常によかった六二%、よかった二三%、あまりよくない九%、つまらない四%、その他二%でした。これを評点計算に換算すると、次のようになります。つまり非常によかった三点、よかった二点、あまりよくない一点、つまらない〇点とし、各項の点数にそれぞれの投票数をかけた総点数を出し、これを投票者全部が非常によかったとした場合を百点として、比例計算しますと、オペラ『蝶々夫人』の評点は、八〇・三点となります。これまでの例会では、七二・四点が最高点で、今回はこれを上廻る点数であります。このような成績をおさめられましたのは、運営委員会の強力な支援によるもので、改めてお礼を申し上げます」

慇懃に云うと、国鉄機関区のサークルに所属している運営委員が、待ち構えていたように真っ先に発言した。

「もぎり式アンケートによれば、非常によかったというのが六二%もあるということであるが、われわれのサークルでは、日本人にとって、あんな屈辱的な内容のものを、よりにもよって、なぜ勤音たるものが取り上げたのかという声が非常に多い。われわれ運営委員会が最終的に『蝶々夫人』の上演を諒承したのは、今までの『蝶々夫人』ではなく、新しい内容面をもって取り上げるという基本方針を確認し合ったからである、それにどうしてあのような結果になったのか、これは重大な問題である、今日の運営委員会は、特にこの点にしぼって討議すべきだと思う」

討議の主導権を握るように提案すると、大阪鉄鋼サークルの運営委員が、
「異議なしや、僕自身もあのオペラを観ていて、どこにわれわれが取り上げた意義が現れてるのか、理解に苦しんだ、第一、蝶々夫人の死は、ピンカートン即ち、当時のアメリカ帝国主義を代表する海軍士官へのレジスタンスであると考えるのが当然やのに、今度の演出では、その点が明確に打ち出されてないのは、大きな誤りや」
がぶりと番茶を呑みながら云った。流郷は、口もとに笑いをうかべ、
「それはちょっと図式主義に割りきり過ぎた観方じゃないでしょうかね」
「いや、単なる図式主義で云うてるのやない、『蝶々夫人』を、今までにない積極的な意図をもって取り上げた以上、その積極性とは何かということは、当然、論議されんといかんやないか」
再びがぶりと番茶を呑み、大阪弁でまくしたてると、
「異議なし！」
五、六人の大きな声が上がり、東洋電機サークルの運営委員が発言した。
「国鉄機関区、大阪鉄鋼の両運営委員の指摘は正しいと思う、今度のオペラは、アメリカやヨーロッパで上演された『蝶々夫人』の流れを汲む単なる恋物語式のもので終っている。われわれの意図する『蝶々夫人』はそんなものではない、例えば第一幕でピンカートンが蝶々さんと結婚するその日、『未来の妻はアメリカ女性――』と唄うところがあるが、あれなど、日本女性に対する人格無視も甚しく、明らかにアメリカ帝国主義者の被圧迫民族に対する優越的な態度というべきで、領事のシャープレス然り、彼は始めは蝶々夫人に善意をもって接し、何かと慰め、同情するように装うが、結局、最後はピンカートンを庇う立場に豹変する、こういう彼らの思い上がった優越意識は、日本人に影響のある水域で水爆実験をする時の行動、つまりわれわれをモルモット視している意識に共通するものがある！」
そこここから賛成の拍手が鳴った。運営委員会は、明らかに最初から一つの意図を持って進められているようであった。国鉄機関区、大阪鉄鋼、東洋電機、近畿電力など現場勤労者の二十代の運営委員たちは、歩調を揃えて『蝶々夫人』の成功を否定するつもりであるらしかった。流郷はゆっくり煙草に火を点けた。
「水爆実験のことなど云い出したら、音楽以前の政治、思想の大問題になり、とても一時間や二時間の討議で終るも

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.